

彌敷に付せられた尊稱の類であるならば、新疆發見のペレーリー語の聖書の断片に屢々見えて居る所の *kādōš yīshō* 郎や “Heiliger” Jesus に對するものではあるまいが、此の語は希伯來語なる」と Müller 氏の *Handschriften-Reste in Estrangelo-Schrift aus Turfan. II. 61* に見えて居る通りである。

「懸掛」は「咸掛」と同様で、唐代には或の字に對して惑の字を用ゐた例は少くない。

(藝文第九卷第一號、大正七年一月)

(編者註、本文には、いわゆる論文「景教經典序聽迷詩所經に就いて」とともに、それぞれ圖版を添附すべきであるが、すでに昭和六年十月、東方文化學院京都研究所から「一神論」卷第三と「序聽迷詩所經」一卷とが、コロタイプ版として出刊されてるので、本書では兩者の圖版は割愛する)とした。